

## トーマス・マン自伝・二篇

岡 光 一 浩 訳

### (1)履歴 1930

私は1875年6月6日、リューベックにおいて、この帝国直属自由都市の商人であり市参事会員であったヨーハン・ハインリヒ・マンと、その妻ユーリア・ダ・シルヴァ＝ブルーンズとの次男として生まれた。父は祖父曾祖父の代からのリューベック市民であったが、母はリオ・デ・ジャネイロにおいて、農場主のドイツ人を父とし、ポルトガル＝クレオーレ系のブラジル人を母としてこの世に生をうけ、7歳の時ドイツに移住してきたのであった。

父の穀物商会は私が子供の時百年祭を迎えたが、当然その相続者になるものと決められていた私はリューベックの「カタリーネウム」実科高等学校に入学した。私は学校が嫌いで、学校の諸々の要求には最後まで応じなかった。——それは外部から強制される諸要求に反抗する生まれながらの激しい気持から出たもので、私は後になってそれをやっとうまく矯正することができるようになった。私の現在ある教養はもっぱら自由な独学によって獲得されたもので、学校の授業から学んだものは最も初歩的な点にすぎなかった。

父は私が15歳の時、比較的若い年齢で死んだ。そして商会は解散した。2・3年後、母は弟や妹を連れて、リューベックを出、南ドイツのミュンヘンに移り住んだ。私は学校の勉強をどうにか終えると、母を追ってミュンヘンにゆき、まずこの地の、父と親しかった支配人の或る火災保険会社の無給見習い社員となり、その事務所に勤務した。

その後、私はジャーナリストになるための準備としてミュンヘンの大学で、つまりミュンヘン大学とミュンヘン工科大学で歴史やドイツ経済や美術史や文学史の講義を聴講した。そうした生活を続けていた間の一年間を、私は4歳年上の兄ハインリヒとイタリアで過ごしたが、その時期に私の最初の短篇集『小

男フリーデマン氏』が刊行された。長篇小説『ブッデンブローク家の人々』を書き始めたのもローマであったが、これは1901年に刊行され、今日までドイツの読者を獲得し続け、百万部以上の売れゆきをみせている。

この長篇小説のあとには比較的短い小説が続いたが、これらは短篇集『トリスタン』のなかに収録されている。そしてこの短篇集のなかで最も特徴あるものは北と南の問題を扱っている芸術家小説『トーニオ・クレーゲル』であろう。そしてその後が続いたのは時々劇場にも取り上げられている<sup>レーゼ・ドラマ</sup>読み物劇、ルネサンス・対話劇『フィオレンツァ』である。

1905年、私はミュンヘン大学の数学教授アルフレート・プリングスハイムの娘と結婚した。彼女は有名なベルリーンのジャーナリスト、エルンスト・ドームとドイツ女性解放運動で指導的役割を果たしたその妻ヘートヴィヒ・ドームとの孫娘にあたる。私たち夫婦のあいだには6人の子供が生まれた。3男3女で、長女は舞台上で活躍し、長男は私と同様文学に携わっている。

新婚生活から生まれた私の最初の文学作品は長篇小説『大公殿下』であった。宮廷小説であるこの小説は形式的で代表的な生活形式の心理学と、貴族的で憂鬱な意識と共同生活の諸要求との総合といった倫理的な問題とを包むための衣服となっている。次には『詐欺師フェーリクス・クルル』という長篇小説の執筆が続いたが、これは私の愛好している伝承の一要素、つまりゲーテ的な自己形成的自叙伝的なもの、貴族的告白的なものをユーモラスな犯罪的なものに書き換えるというパロディーの観念から生じたものであった。この長篇小説は断篇のままになっているが、そのうちのこれまで刊行されたものを私の書いたもののうちで最も成功した最も優れたものと見做す識者も多くいる。これは最も私個人に関するものといえるかもしれない。なぜならば、これは愛情に満ちたものであると同時に解体力ももち、そして私の作家としての使命を規定している私の伝統に対する関係を具体化しているからである。

1912年、小説『ヴェニスに死す』が刊行されたが、これは『トーニオ・クレーゲル』とともに短篇小説の分野で最も読まれている作品である。この小説の執筆の終る頃に教養小説『魔の山』の構想が浮かんだが、これは初めの数章のところで戦争によって中断され完成には至らなかった。

戦争は私が身体でもって直接それに携わることを要求しはしなかったけれども、その終結に至るまで芸術家としての私の活動を完全に中断させてしまった。しかも同時に、戦争は私の根底に徹底的な検討を加えるように、また人間的で精神的な自己探究と信仰告白をおこなうように私に強要したのであった。その

沈黙物が1918年に刊行された『非政治的人間の考察』を形成している。この作品のテーマはドイツ性という問題を個人的に強調したもの、つまり論争する保守主義の精神によって語られた政治の問題である。その場合の保守主義とは進歩的生によって多くの修正が加えられたうえの保守主義のことである。私の社会的で道徳的な観念の展開については『講演と答弁』『労苦』『時代の要求』といった評論集がその顛末を報告している。

中立国や、大戦中は敵国であった国々への国境が開かれると、国外への講演旅行が始った。私はまずオランダ、スイス、デンマークに招かれた。スペインに行ったのは1923年春のことであった。その翌年には当時創立されたばかりのロンドン・ペンクラブから正賓として招かれた。また2年後にはカーネギー財団のフランス支部の招待でパリに行った。そして1927年にはワルシャワを訪ねた。

そのあいだの1924年秋、長年にわたる遅延の末、2巻の長篇小説『魔の山』が刊行された。この作品に対する読者の関心は2・3年後には百版を重ねるほどであったが、このことはこの叙事的構造をもつ観念小説がまさに時機を得て刊行されたことを物語るものであった。この長篇小説で扱われた問題はその問題の性質上大衆向きではなかったが、教養ある人にとっては焦眉のものであった。そしてそこに描かれている社会一般の苦難をとおして、多くの読者の感受性はある高揚を体験したのであった。このことは大胆な、そして芸術のもつ形式を実に任意に描きだしている私のこの作品にとっては好都合なことであった。

『非政治的人間の考察』の執筆が終るとすぐにも、私のかなり大きな小説群にひとつの牧歌調の散文である動物習作『主人と犬』が加わった。『魔の山』のあとには革命とインフレの時代の市民小説『混乱と若い悩み』が続いた。そして目下のところ、この自伝に書くことのできる最後の作品は1929年に書いた小説『マーリオと魔術師』である。これは、素材や意図からみても、以前のすべての作品からはるかに離れ、市民的で個人的な領域を出て、過去や神話の領域に入り込んでいる或る新しい長篇小説の仕事の中に生まれたひとつの挿話的な作品である。およそ半分までこぎつけたように思われるこの聖書物語については『ヨーゼフとその兄弟』という表題を計画しており、すでにその一部は雑誌や公開朗読会の見本刷によって発表されている。私が1930年の2月、3月、4月におこなったエジプト、パレスチナの視察旅行はこの作品と関連をもっている。

今ここに私は若い頃からの生活と作品の簡単な概観をしてきたが、私の人生

の努力に対し同時代の人々の心からの関心が、また外国からも公式の讃辞がよせられた。1919年にボン大学哲学部から名誉博士の学位が授与されたのもその一例である。そしてさらにドイツ人の肩書きに対する好みを満足させるかのように、故郷リュベックの市参事会は2・3年後の市の記念祭の時に、私に教授の称号を授与したのであった。私は国自らが指命にあたったプロイセン芸術アカデミーの文学部門創設の最初の会員の一人に選ばれた。私の50歳の誕生日には数多くの祝辞が公表されたが、そのことを思い出すと私は心から感謝せざるをえない。こういった様々な榮譽のうちで最高の榮譽は昨年、スウェーデン・アカデミーによって授与されたノーベル賞であった。しかし私は、こういった成功による混乱においても自分は決して功積の客観性に対する鋭ぎ澄ました意識を失うことはなかったと、そして少しの間でも自己批判の気持を眠り込ませることもなかったと確信をもっていることができる。後世の人々に対して私の作品が及ぼす価値と意義はいまだ決定しないでおいてほしいと思う。私は自分の作品を意識的に、つまり良心的におこなわれた生きるためのたたかひの個人的な軌跡にほかならないとみているのであるから。

## (2)履歴 1936

私は1875年6月6日、日曜日正午に生まれた。星位は吉兆であった。これは後にしばしば占星術の大家たちが、私には長く幸福な生と安らかな死が約束されていると証言してくれたとおりでである。この証言の生に関しては、彼らはまさにかなり生のもつ事実によって導きだしているということが出来る。なぜなら生には多くの幸福とか恵みが存在するものであるからであり、それどころか生的前提に非常に厳しい阻止や困難が存在しようとも、生のすべての傾向は幸福と呼ばれるべきものであるからである。私の本の中の一冊、『ヤーコブ物語』において私は次のように書いた。「なぜなら祝福を受けた人の生は全くの幸福であり、浮沈のない安寧の連続である、と考えることは浅薄な迷信にすぎないからである。元来、祝福というものは祝福を受けた人々の本質の根底を構成するにすぎず、おびただしい苦悩と試練をぬって時折り、それはいわば金色にきらきら光り輝くのである。」——この生についての意見は全く私自身の生から導きだされたものである。

私の生まれた町は中世の面影を残すバルト海に近い美しい古都リュベック

クである。この町はかつてハンブルク、ブレーメン、ダンツィヒとともにハンザ同盟に属し（このハンザ同盟についてはアメリカの私の読者はおそらく歴史の本で学ぶであろう）、帝国直属自由都市であった、そしてかつてのヴェネツィアのように共和制をしき、公式には閣下という称号をもつ市長（共和国総監）と、しだいにこっけいな意味合いをもつようになった「極めて賢明なるお方」という称号をその会員がもっていた市参事会（父はこの会のメンバーであった）と、そして市民のなかから選ばれ、そのため簡単に「市会」と呼ばれていた議会とによって統治されていた。

私の子供時代は愛され恵まれた幸福なものであった。4人の同胞と私は父が自分と家族のために建てた市内の優雅な家で育ち、古い家屋敷の第二の家を訪ねるのを楽しみにしていた。この家は18世紀に建てられたもので、ロココ調の切妻壁には「主よ、守り給わん」と格言が刻みこまれ、そこには父方の祖母がひとり住んでいた。今日ではそこは「ブッデンブローク・ハウス」ということになって、物好きな旅人の訪れる場所となっている。——私が子供の時百年祭を迎えた穀物商会の所有者である父は祖父曾祖父の代からのリュベック市民であったが、母はリオ・デ・ジャネイロにおいて農場主のドイツ人を父とし、ポルトガル＝クレオーレ系のブラジル人を母としてこの世に生をうけ、7歳の時ドイツに移住してきたのであった。私は自分の資質のなかの遺伝的なものを自問してみると、ゲーテの有名な詩句を想起し、自分も「人生を真面目に営むこと」を父から、「楽天的気質」すなわち芸術的感覚的性向と——ごく広い意味で——「作り話を好む気持」を母から受け継いでいることを確認せざるを得ない。

私の青春時代で、いや私の人生全般において一番幸福だった時期はほとんど毎年家族の者と近くの海水浴場トラージェミュンデで過した4週間の夏休みであった。私はこの滞在地の世話の行き届いた洗練された牧歌的気分を心から愛したが、その反面その分だけ私は学校を嫌い、その要求には最後まで応じなかったのである。私をそのようにさせ、私にあらゆるその環境を含めて厳しい勉強というものを嫌いにさせたのは学校の規律や訓練法に対する反抗心からであった。つまり、それは夢想的な怠惰とか無頓着とか、何もしないでぶらぶらしたり静かに読書する自由な時間を持ちたいという欲求とか、平均的な或いはそれに近い性格をもつ仲間たちに対する嫌悪であった。しかしそうでありながらも、私は仲間たちに尊敬され、そのうえ人気者であった。それはただただ私が都市貴族の生まれであるためだけではなく、本来特に、生徒たちには漠然とし

た魅力を与えはするが先生たちにはとりわけあるまじきものとみられていた定義づけの難しい形式的な、精神一般の優越によるものであった。この優越なるものは当時まだ名を与えることのできないものではあったが、特異な感情や思想のすべてと結びつき、私自身にとっては高慢や憂鬱や苦悩の源泉であった。しかしながらこの優越こそが、初めの頃はその把えどころのなさや目標のなさのために他のあらゆる才能よりもつねに認められ歓迎されることの少ないが、後には場合によって同時代の人々に尊敬に値する社会的働きをすると認められることもある文学的芸術的資質であり、詩的資質である。

その資質が創作の面で初めて現れるのが弟や妹と一緒に両親や叔母たちの前で実演してみせた子供っぽい戯曲であった。その次にはシュトルムとハイネの影響を受けた詩が生まれた。ずっと後になって初めて私は小説の習作を試みたが、それも批評的なエッセイの段階をおえて後のことである。というのもギムナージウムの第2学年上級の時革命的な2・3人の最上級生と一緒に発行した『春の嵐』というタイトルをもつ学校にはあまりにそぐわない学友雑誌で、私は主として哲学的煽動的な論説家として名をなしていたからである。私は人生の大部分を、ほとんど40年の歳月をミュンヘンで過した。その地へはまず母が父の死後、弟や妹を連れて移っていったのであり、私は学業を続けるためにもう一年北の故郷に残った。そののち私は家族を追ってこのバイエルンの首府に移った。——この時期は社会的にも精神的にもはっきりしない暗中模索の準備期間であり、文学や歴史の専門に関する大学での手当たり次第の勉強や、火災保険会社の事務所での無給見習社員としての挿話的な仕事があり、兄ハインリヒと一緒にイタリアのローマやその近郊で過した一年間があった。このイタリアにいる時——私は21歳であった——私の比較的大きな小説『小男フリーデマン氏』がベルリーンの月刊雑誌『ノイエ・レントシャウ』に発表され、ある種の文学的センセーションをまき起した。そしてそのすぐ後、この小説を代表作とする短篇集が発行された。また私が長篇小説『ブッデンブローク家の人々、ある家族の崩壊』を書き始めたのもイタリアの奥地、つまりサビニ連山中の偉大な作曲家の誕生の地パレストリーナに滞在している時のことであった。この長篇小説はその後25歳の時ミュンヘンで完成され、まぎれもなくドイツの大ベストセラーの一冊となり、ドイツの真の家庭用信仰書となった。

この市民的叙事詩は1901年に刊行された。その25年後に出た、その当時の騒々しいヨーロッパの事件によってその弁証法が養われている時代小説『魔の山』は国民のあいだに、世界の人々のあいだに『ブッデンブローク家の人々』

に似た影響を与えることとなった。60歳になった私は今3つ目の大作聖書小説『ヨーゼフとその兄弟たち』に取りかかっているが、この作品の素材はもはや市民的な現在ではなく、深い最も深い過去、つまり神話や伝説の世界である。この小説のうちの2巻『ヤーコブ物語』と『若いヨーゼフ』はすでに世に出、ほとんどのヨーロッパの言語に翻訳されている。3巻目の『エジプトのヨーゼフ』は完成間近かであり、4巻目の『養い人ヨーゼフ』がそれに続く予定である。ところで上で述べた青年期の作品、熟年期の作品、老境に入ってから作品、この3つの私の主要作品のあいだにはかなり多くの比較的簡潔な作品群がある。喜劇的な性格をもつ小さな長篇小説『大公殿下』、時として劇壇を刺激する対話劇『フィオレンツァ』、そして24にもものぼる大小の短篇群、例えば『トーニオ・クレーゲル』『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』『ヴェニスに死す』『主人と犬』『混乱と若い悩み』などである。——これらの作品のすべては今ちょうど私のアメリカの出版者によって分厚い著作集（海の向こうのアメリカ流にいうと>選集オムニバスと呼ばれる）にまとめられている。しかし物語の形式をもつこの作品群も最初から今日までつねに批評やエッセイに伴われ貫かれているのである。そしてその批評やエッセイのうちで広範囲にわたる影響を及ぼし最も浩瀚な作品が『非政治的人間の考察』であり、これは戦争によって熟したものである。その後の批評やエッセイは評論集『講演と答弁』『労苦』『時代の要求』『巨匠の苦悩と偉大』に収録されている。

私のこれまでの生涯における作品は大変数多くあるが、もうここではこれ以上いわないことにする。これらの作品にはとりわけ私の憂慮が、いつも私の最上の力が注がれているのであるが、私は決してフロベールのような仕事だけの世捨て人ではなく、実際に詩人の性質に存在する以上に世間離れであろうなど願ったこともなく、いつも人間的なものや社会的な生に対して、国家の文化と関連する領域に対して、家族に対して、社会性と友情に対して、娯楽と享楽に対して自己の本領を発揮しようと努めたのである。芸術と生との、芸術家精神と人間性との対立の問題に私は早くから深くとらえられていた。その場合私は芸術に運命づけられているとは感じていたわけではないが、芸術こそ私の天職であると感じていたのであり、決して芸術で身を滅ぼそうなど思ったこともなく、もっぱら出来るだけ人間であろうとしたのである。私は愛することもしたし、結婚もした（当時私は30歳であった）。妻はミュンヘン大学の教授の娘で、彼女の生命力に満ちた性質は近年2度彼女と一緒にアメリカに渡った時、アメリカの私の友人たちの高く評価するところであった。私にとっても彼女は

今までの人生を通して大変すばらしい伴侶であった。彼女は私のために娘3人、息子3人のあわせて6人の子供を生んでくれた。私もかつて父がリュックでしたように、私自身と家族のためにイザール河畔のミュンヘンの別荘地にすてきな家を建てたのであった。私たちはそこに19年間住み、祖国ドイツから引き離されることとなった1933年のドイツの破局の際それを失った。私の子供たちのうち、長女エーリカは女優となり、文学キャバレー「胡椒挽き」の設立者兼指導者としてこの世に名を知られるようになった。2番目の長男クラウスは私や名の知れた叔父である私の兄ハインリヒと同様作家となり、若い頃小説家、批評家としてすばらしい作品を著している。次男ゴーロはハイデルベルク大学の哲学博士で、現在フランスのレンヌ大学でドイツ語の教鞭をとっている。そして下の3人の子供のモーニカ、エリーザベト、ミハエルにおいては、父である私の性格のなかに拘束されているように存在してはいるが、私の散文のなかに様式として入り込んで作用するといったもっぱら間接的にしか明らかにされない要素が、つまり音楽が優勢を占めている。娘2人はピアニストに、一番下の現在17歳になる息子はバイオリンニストになるべく修業中の身である。

私は今も相変わらず、これまでの長い人生において私のために催された心暖まる祝典を想い起こし、感謝の気持で一杯である。例えば、ミュンヘンの旧市庁舎で市の代表者たちの出席のもとに非常に盛大に催され、私の仕事に対して人々が理解をもち親しい関係を結んでいてくれるのを充分に知ることのできた私の生誕50歳の祝典、さらに1929年に私に授与されたノーベル文学賞受賞の際のストックホルムでの祝宴、そして『ヨーゼフとその兄弟たち』の第一巻のアメリカ版刊行と重なった私の59歳の誕生日に、妻と私のためにニューヨークの文学界が市長ラ・グァーディアの出席のもとにプラザ・ホテルで催してくれた大饗宴。

私は70歳（訳者注——70歳は1945年であり、60歳の誤りと思われる）を迎えた時、チューリヒで暮っていたが、そこに私は3年前に自分の住居を建てていたのだった。その読者たちは私がそこに居を定めたことを機に、私のために祝宴を開いてくれたが、その際彼らは私に対する共感を非常に快よく心から表わしてくれた。この日から私が保管している最も貴重なものは私の出版者から手渡された多くの国々の作家や芸術家たちの手書きの挨拶や祝辞の入っている美しい装丁の小箱である。当時第一級の精神人たちが私の生や努力に対して大きな感動のこもった尊敬を書き記しているこれらの文章を通読すると、私は、「私たちは私たち自身に対して満足することは稀れだ、それゆえ他人に対して



満足を与えることで自分自身を慰めるのだ」というゲーテの言葉の美しさと真実を深く感じるができるのである。

テキスト

Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1974.

(1)Band X I S. 413 — 417 [Lebenslauf 1930]

(2)Band X I S. 450 — 456 [Lebenslauf 1936]

(訳者跋)

ここに訳出した二篇はトーマス・マンの書いた短い自伝であり、S. フィッシャー版全集に収録されているものである。この全集には他にも自伝として、『略伝』(Lebensabriß, Bd. X I, S. 98 — 144) 『私の時代』(Meine Zeit, Bd. X I, S. 302 — 324) 『自分のこと』(On Myself, Bd. X III, S. 127 — 169)などがある。この3つの自伝については新潮社版トーマス・マン全集に邦訳があり、我々はしばしば活用することができた、しかしここに訳出した二篇の自伝はこの邦訳全集には収録されておらず、他にも邦訳はないと思われるので、ここに敢えて訳出しを試みた。たとえ短い自伝であり、邦訳されている自伝で補える点が多いとしても、補えきれないものをこの二篇の自伝はもっていると考えたからである。

なお(1)の『履歴 1930』は1930年ストックホルムのローヤル出版社から刊行された『1929年のノーベル賞』(>Les Prix Nobel en 1929<)に初めて掲載され、のちにストックホルム版全集『講演と評論 I』(Reden und Aufsätze I, Frankfurt am Main, S. Fischer 1965)に収録された。当時のトーマス・マンは1929年12月10日にスウェーデンのストックホルムで行われたノーベル文学賞授与式に参加して帰途についたばかりであり、世界の人々の祝福のなかで自分を客観視することを忘れないようにしたいという言葉をししばしば発している。彼は1930年になると次の仕事(ヨーゼフ小説の続稿)の準備のための視察旅行(2月~4月)に出かける。この自伝はその後帰国してからのものと思われる。

(2)の『履歴 1936』はアメリカの読者のために、1936年ボストンで刊行された『人物像と自画像』(>Portraits and Self-Portraits<, ed. by George Schreiber)に初めて英語で掲載された。ドイツ語の原文のテキストはスイスの連邦立チューリヒ工科大学付属のトーマス・マン文庫に大切に保管されている。この自伝も(1)の自伝と同様、のちにストックホルム版全集『講演と評論 I』に収録された。これはH. ビュルギン, H = O. マイヤー共編の『トーマス・マン年譜』(Hans Bürgin/Hans-Otto Mayer: Thomas Mann Eine Chronik seines Lebens, S. Fischer Verlag, 1965)によって、内容を考えると1936年7月頃の執筆と思われる。マンはこの年の11月にはチェコの国籍を得、12月にはドイツの国籍の喪失を宣告され、亡命生活が決定的となる。

(1982, 4)